五十字劇評NO.77

言わせて！今日の芝居

同盟通信

【10代】

▼戦争はいきなり起きるのではなく、知らず知らずのうちにのみこまれていくと思いました。報道で事実を伝えること、国の宣伝機関になること、どちらも人間らしいと感じました。（女性）

【20代】

▼かつては一個人が情報を自由に入手することが難しく、その情報発信元も限られたものだったからこそ、悪い方へも良い方へも大きな力となったのだろうと思いました。しかし、今は見え過ぎるくらい、知りすぎるくらいに世界と自分は近く感じるようになりました。その近さはちゃんと当事者意識の近さであれるよう、色々なことへの関心を持ち、考えることを諦めないで生きていきたいと思います。まずは市民劇場で芝居を見続けられるようにするのが第一歩ですかね。（女性）

【30代】

▼現政権の動向に疑問を抱き、春よりデモ参加している身として、観劇できて幸いな作品でした。もう一回観たかった…！ 今年3月の『グレイクリスマス』と並んで大変印象に残った作品となりました。セレクトして下さった方、ありがとうございます。（女性）

▼演劇全体としては良かった。全ての役者さんの熱演も素晴らしかった。（セリフの量）また舞台照明も良かった。こんな風に照明ひとつで場面を転換できるとは！会議室から日比谷公園の情景に自然に移れた。ただ脚本がダメだった。毎回期待している古川健さんの作品だからこそ。この脚本ではジャーナリズムのあり方にきちんとした答えあわせができていない感じで終わってしまったのが残念。観る者に問いかける作品だったとしても、最後に、主人公大岡だけでもきちんとした結論を出してほしかった。（男性）

【40代】

▼体制に逆らうことは、その人間の全てを失うことと同義、それが戦争というもの。自分には真似できないが、なればこそしなければならないことがある。（男性）

▼戦争を振り返る様々な芝居をこれまで観てきたが、報道人から見た先の大戦というものがどうだったのか、解像度が高まった。同じ時代にあって戦争から逃れられる人、責任を負わずに済む人はいないし、これから起こる可能性のある戦争についてもそれは同様なのだと思います。（男性）

▼報道は真実を伝えず、戦争は続いた。結果、どれだけの命を犠牲にしたのか。大岡や報道に関わる人達の苦悩や葛藤がとても生々しく感じられた。もし今の日本が同じ状況になった時、権力に屈せず、戦争の愚かさを叫べる人でありたいと思う。（女性）

▼最後のシーンでかつての同僚達が「戦争への反省は一生背負って生きていかなければいけない」と言っていたことが強く印象に残りました。しかし、今の首相は「自分は当事者ではないから反省の必要はない」と断言していました。国のトップがこんなことをいう人になったこと、マスコミが物を言えず、聞けず、情報が入ってこないもしくは身の周りで起きていることと報道に隔たりを感じることすらあり、劇中で起きていることと重なり恐くなりました。今まで見てきた戦争作品の中で一番素晴らしいと思いました。同盟通信の方が背負ってきた反省を私たちは引き継いでいかなければいけないと思います。（性別未記入）



【50代】

▼報道の在り方と、情報の受け取り方について考えてしまいました。現代では報道機関だけではなくネットで個人も情報を発信できる。様々な情報から、自分が信じたい・見たい情報だけを受け取るのではなく、客観的に受け取る力が必要になってきていると思います。（女性）

▼戦前戦中の報道は大本営発表しか知らず、通信については全く無知だった。そして真実を伝えられない葛藤を抱えながら苦悩した人々がいたことは『帰還不能点』と重なる。観劇中、常に自分なら誰だと問われ、大岡になりたいが保身の黒田になりそうでこわくなった。そんな時が来ないようにどうすれば良いのか問われ続ける古川健作品でした。（女性）

▼途中軍の言いなりになろうとする人達に腹が立って、声を出しそうになるようなシーンもありましたが、全てが終わってみると、それぞれがその時なりに必死に生きていたんだろうと思いました。私はどうすればよかったのだろう？という問いは、生きていく上で大事なことですね。ありがとうございました。（女性）

▼8月から入会し、初めての公演が『同盟通信』で硬い内容で理解できるか？との思いで観ました。事実を伝えようとしても伝えられない記者の苦悩が戦時下にあったことを初めて知りました。時代が変わっても現代の社会でも（組織の中でも）その苦悩はある話で、正しい真実を伝えていくことの難しさ、難しくても伝えていく大切さ、それら両面を考えさせられた内容でした。初めての公演で内容も難しいとのことで、事前にサークルの担当の方が資料を用意して渡して下さったのは有難かったです。いろいろなジャンルの内容の公演を楽しみにしています。（女性）

▼とても良かった。戦争について考えたり、知らないことを知ることができるこういうお芝居を観る経験は、とても大切だと思いました。（女性）

【60代】

▼古川健さんの脚本が好きで、今回も楽しみにしていました。思い通りの骨太の作品で考えさせられました。大岡明雄が真実と軍部の圧力に葛藤する…。自分なら…と考える事ができたのも、この舞台があればこそと思います。（女性）

▼現在に続く、反省なきままの戦争。日本という国の戦中の様子を情報通信の密室の場で描く、貴重な芝居の力業よ。（女性）

▼戦争について知らないことが多すぎる。知らされていないことが多すぎる。先日、新聞でこんな言葉を読んだ。「嘘は向こうから巧妙にやってくるが、真実は自らさがし求めなければ見つけられない」まさにこの『同盟通信』の舞台を言い表わした言葉だと思った。芝居でしか学べないことがたくさんある。教科書にのせないことがたくさんある。真実は自らさがすことのひとつに芝居があるということを感じた例会だった。（性別未記入）

▼報道の創成期とも言える戦時中では、その是非を語るテーマに無理はなかったか。当時の誤報道は、国民の世論ありきだと思う。起伏のない物語になってしまった。（男性）

【70代】

▼「報道とは何か？報道には何ができたのか、報道はあの時どうすれば戦争に加担しないでいられたのか」のナレーションを聞き、私なら多数意見に流されると思っていました。1945年3月に東京に大空襲があったと聞くたびにどうしてここでやめることができなかったのか、いつも疑問に思っています。現在も世界各地で戦いが続いていますが、勝手な言い分で始めた侵略だからなかなか終われないのかもしれません。（女性）

▼今回の『同盟通信』でも、以前上演された『帰還不能点』でも、「この戦争は負ける」とわかっていたのに力の強い勢力にのまれて、本当に多くの人が亡くなってしまった。今も声の大きい、数の多い高市政権がどんどん戦争を出来る国にしようとしている。私達は、いや私はどうやって反対していくか、何をしたらよいのか考えなければならないと思った。（性別未記入）

▼8月例会は戦争を考える機会となっている。『同盟通信』は戦地に行かずとも戦っていた人々がいたこと。そして今もなお私達の生活の中に潜んでいる戦争。私はどう向き合うのでしょうか。（女性）

▼運営担当を明るく楽しい場に…と考え、それが仲間を増やそうとする活力になると信じ努めました。良い仲間に出会えました。（女性）

【80代】

▼何となく今の時代と重なって見えるのは私だけ。皆んなしっかり政治に関心を持って。もう騙されない。（性別未記入）

▼1930年生まれの女性にこれまでの人生を尋ねる機会があった。遠い昔のように感じられながらも目の前の戦争をくぐり抜けた人がいる。その女性の96年の歳月と世の動きを重ねて想像を巡らせた直後の『同盟通信』であった。緊迫する情勢を感じながら陸軍、外務省、そのはざまで悩む記者の台詞を聞き逃すまいと耳をそばだてる。こんな緊張感は久し振りである。同盟通信社社員の揺れ動く心の様を感じとる。このステージは決して過去のことではない。今現在、報道に携わる人たちは葛藤しながらの日々であろう。そうでない人、体制のいいなりにならなければならぬ人もいるであろう。真実を報道する勇気は日に日に難しくなって来ている。だからこそ今私たちは声をあげていくことなのだと、しみじみ感じ、考える8月例会であった。古川健の投げかけは重い。（女性）

▼政府の思惑を発信する巨大通信社で働く人々が、個々に抱えていた葛藤を伝えている。次代への希望を抱いて。（女性）

▼古川健さんのせりふ劇、やっぱりおもしろい。ずっと気がぬけなかった。へんてこりんな今の世の中にも繋がる様な話。同盟通信社は現在のどの新聞社になるのかな。（性別未記入）



編集スタッフから

『同盟通信』は青年座が劇団チョコレートケーキの古川健に依頼した書き下ろしの作品です。そのテーマも青年座の演出家の発案から出たもの。でも出来上がった舞台はどこから見ても百パーセント古川健の世界でした。戦争責任は国民一人一人が考えなければいけない、という痛烈なメッセージは、いつにも増して心に響くものでした。



劇団青年座

同盟通信

national news agency DOUMEI